

日本小児血液・がん学会造血細胞移植委員会あとがき

小児科領域の造血細胞移植登録は 1984 年に誕生し、2006 年からは造血細胞移植登録が一元化されて今日に至っており、いよいよ 30 歳を迎えました。この間、造血細胞移植を取り巻く環境も大きく変化し、最近では小児と成人を合わせて年間 1500~1700 例の自家移植、3000~3500 例の同種移植が行われるようになり、2012 年 9 月には「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」が全会一致で国会を通過しました。その後は日本造血細胞移植学会、日本骨髄バンク、日本さい帯血バンクネットワークのご協力で急速に法整備が進められ、2014 年 1 月 1 日より法の施行が開始されております。これに伴い、データセンターも一般社団法人 日本造血細胞移植データセンターとなりました。

本法律の基本的な方針として、「特に、造血幹細胞移植の治療成績については、患者や国民向けの基本的な情報に加え、医療機関、研究機関、患者相談窓口を設けている団体等に詳細な情報を提供できるようにする取組が必要」と記載されています。即ち、今後の造血細胞移植登録の在り方として、医師や研究者のためだけではなく、国民や患者団体に向けても情報を提供できることが求められています。小児科領域で造血細胞移植が行われる対象症例数は、遺伝性疾患などの稀少疾患はもちろんですが、化学療法の上進によって移植適応が限られている白血病においても決して多くはありません。つまり、1 例、1 例のデータの重みが非常に大きく、遺伝性疾患においては疾患細分類や遺伝子情報、白血病においては細胞遺伝学的なリスク因子など、治療成績の解釈に不可欠な情報が増え続けています。造血細胞移植登録が長い年月を跨いできただけに、最近の登録例と 10 年以上前の登録例では情報量に大きな差ができており、貴重な治療例のデータが十分に生かし切れない状態が存在しています。また、移植担当医師の世代交代が進み、各施設とも第二世代の移植責任医師が活躍していると思いますが、初期の移植例をご存じの担当医師がいらっしゃる間に、是非欠損値を埋めるためにご協力頂きますようお願い申し上げます。

小児血液・がん学会造血細胞移植委員会委員長 矢部普正
小児科事務局 神奈川県立こども医療センター
田淵 健、小松崎和子、長野明美、気賀沢寿人

(公財) 日本骨髄バンクあとかき

造血幹細胞移植を取り巻く環境が大きく変貌しつつあります。まずは、2012年9月に成立した「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」が、本年1月1日から施行されることになりました(根拠法)。これに先駆け、2012年4月に、骨髄移植推進財団は公益財団法人として認可され、昨年の2013年10月には、その名称が骨髄移植推進財団から(公財)日本骨髄バンクに変わりました。造血幹細胞提供関係事業者である日本骨髄バンクと全国8か所にある各さい帯血バンクは、根拠法施行後3か月以内に前者は「骨髄・末梢血幹細胞提供あっせん事業者」の、後者は「臍帯血供給事業者」の許可申請の手続きが必要となります。一方、昨年の10月に、日本赤十字社が唯一の造血幹細胞提供支援機関として国から指定されました。日本造血細胞移植学会のデータセンターも、2013年10月から日本造血細胞移植データセンターとして新たな組織にrenewalされています。

このように根拠法に基づき、必要とされる役者が勢揃いしつつあります。これからまさに正念場でしょうが、国民に安全な移植環境を安定的に提供できる基盤を早急に整備し、世界に類を見ない体制の下、さらなる移植成績の改善・向上を図ることが、我々関係者に課せられた使命であります。加えて、一般市民にも根拠法ならびに移植医療を理解していただく必要があり、今後の啓発・広報活動の重要性が窺われます。

さて2013年(1~12月)にJMDPを介した移植件数は1360件(うち、PBは20件;国内ドナーが18件、海外ドナーが2件)と過去最高でした。直近の10年間(2003~12)の推移を前期(2003~7)、後期(2008~12)で比較しますと、血縁者間移植件数はほぼ横ばい状態(5,273件 vs 5360件)ですが、非血縁者間移植件数(BM+さい帯血)は8,022件から109,20件と2,898件の大幅な増加でした。ハイスピードで進む少子高齢化社会と、移植年齢のバリアーフリー、移植適応の拡大等により、この増加傾向は団塊の世代が後期高齢者に達する2025年頃までは続くものと予想されます。JMDPは23年目を新たな気持ちで迎えました。新しい法律のもと、ドナーの安全確保と移植成績の向上に今後も努力してまいります。

2014年1月

日本骨髄バンク データ・試料管理委員会委員長 河 敬世

日本さい帯血バンクネットワークあとがき

国内の非血縁者間臍帯血移植件数は年間 1,000 例以上となり、2013 年ついに累計 1 万例を突破しました。これらは世界の臍帯血移植の約 3 分の 1 を占めています。

さて、2013年度は「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」（以下「法律」という）に基づき、バンク体制の法的整備とさらなる品質管理に取り組んだ一年でした。過去11ありましたさい帯血バンクも、東海大学さい帯血バンクの年度末事業終了に伴い、7つ（日本赤十字社北海道、関東甲信越、近畿、九州さい帯血バンクと東京臍帯血バンク、中部さい帯血バンク、兵庫さい帯血バンク）となり、付随した臍帯血データや移植報告データの統合がなされます。また、移植報告の督促がシステム化されたことにより、移植成績の報告率が飛躍的に向上し、これらの積み重ねが今年度の本登録データの集計に繋がっております。

いくつかデータシステム上克服すべき課題もありますが、国内全体を対象とした臍帯血移植に関する論文も、当ネットワークおよび学会関係等からの報告も含めて30篇を越し、日本の移植データがこうした形で海外に向けて発信されましたことは、日本さい帯血バンクネットワークの移植データ管理委員会としても大変光栄でありますとともに皆様のご努力に心より感謝申し上げます。

次年度は、法律の施行に伴い日本さい帯血バンクネットワークとしての事業は終了しますが、現在の移植データ管理委員会は（公財）日本骨髄バンクの造血幹細胞移植データ・試料管理委員会に移行いたします。また次世代TRUMP2の運用も開始され、この移行期間におきましてはいろいろとご不便をおかけすることもあろうかと存じますが、引き続き、移植データの報告にご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、世界一の臍帯血移植国である日本から引き続き多くの研究が発展していくことを心よりお祈り申し上げます。

日本さい帯血バンクネットワーク 移植データ管理委員会
長村登紀子、加藤剛二、熱田由子、磯山恵一、松本加代子、
小田慈、甲斐俊朗、加藤俊一、幸道秀樹、村田誠

データセンターあしがき

2013年10月1日に、一般社団法人 日本造血細胞移植データセンター (JDCHCT) が、事業を開始いたしました。「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」に基づき、「造血幹細胞移植の患者やドナー情報の収集・分析」を国の支援のもと担うこととなります。日本造血細胞移植学会 (JSHCT) が1993年から、日本小児血液・がん学会、日本骨髄バンク、日本さい帯血バンクネットワークと2006年から実施した一元化登録、そしてワーキンググループなどによるこの登録データの解析並びに2000年4月からの血縁造血幹細胞ドナーフォローアップ事業の重要性を、国が認め「造血幹細胞移植の患者やドナー情報の収集・分析」が支援対象となったことは、JSHCT および登録移植施設、研究者の皆様のこれまでの努力の成果であります。特にこの1-2年間のワーキンググループ/データ利用申請による学会・論文発表の活動性の高さは素晴らしいと感じております。JDCHCT 活動開始に伴い、名古屋大学 造血細胞移植情報管理・生物統計学寄附講座は2013年12月末日をもって終了となりました。8年間にわたり JSHCT データセンターのリーダーとしてご指導いただきました鈴木律朗先生に心より感謝申し上げます。

JDCHCT は、これまでの一元化登録・ドナーフォローアップを引き継ぎ、実施していくとともに、収集データおよび解析の質の向上に努めてまいります。法律に基づいた全国調査であり、解析結果を広く、国民にわかりやすく提示していくこと、患者団体などの組織を移植アウトカム・ドナー安全の情報の側面からサポートしていくことも重要な責務となりました。データ収集・管理そして解析の質は最近その重要性をより理解され、また求められるようになってきています。日本発の、TRUMP データを用いた解析結果が多く出るようになり、これらが次の移植医療に反映されていく現状を踏まえましても、その質担保にさらに力を入れていく責務を感じております。データ収集・管理の質の向上を目的として、第二世代 TRUMP を2015年早々にリリースすべく鋭意準備しております。2014年は試験運用とデータの移行を実施いたしますが、ご協力のほどどうかよろしくお願い申し上げます。

全国調査は、当面の移行期には JSHCT/JDCHCT の連名で実施いたします。登録移植施設のみならず、研究者のみならずのこれまでのご尽力に敬意を表しますとともに、今後の、さらなる移植アウトカム (症例、ドナー) 登録の発展のために、努力していきたいと存じます。

日本造血細胞移植データセンター	センター長	熱田由子
	システム担当	坪井秀樹、山田智史、浅野充洋
	データ解析担当	倉田美穂、柳澤昌実
	データマネージャー	伊藤千佳、和田祥恵、高野雅子
	事務局	中澤木聖